

復曲能〈巴園〉の演出について

田村良平* (村上 湛)

平成二十五年(二〇一三年)一月十二日、横浜能楽堂企画公演「美の世阿弥・華の信光」第三回において、観世小次郎信光作の能〈巴園(ばえん)〉を復興、新規に演出を担当する機会を得た。稀少な機会であるから、ここでは試作の型付と共にその内容を報告することにした。

周知のとおり信光は、世阿弥の甥で観世座の実質三代を継承した音阿弥の末子である。能作に優れ、〈船辨慶〉〈紅葉狩〉〈胡蝶〉〈遊行柳〉などの名曲を多く遺している。

〈巴園〉もその信光の手になる脇能だが、記録に残るのは天文十三年(一五四四年)一月十六日、石山本願寺での春日大夫による演能のみ(『證如上人日記』)。この時は脇能ではなく四番目物としての扱い。爾来、長く遺却されていた。平成十八年(二〇〇六年)二月五日、大槻能楽堂自主公演・研究公演における舞台化が近世以後初の復曲である。この時、監修と後見に回って自身は演じなかった大槻文藏氏が今回はじめてシテ

を勤めるに当たり、私が委嘱を受けて全面的に演出を作り直すことになった。この復興初演の舞台は私も見ており、手控えの記録もあるけれど、今回はそれには縛られず、自身の創意をもとに作り直した。したがって、出来上がったものはまったくの新版である。

〈巴園〉は後シテの老仙人が「楽」を舞う天仙物の能である。脇能のシテが「楽」を舞う作品としては、世阿弥の先人で田楽能の名手・亀阿弥(喜阿弥)が関わった祖形が『申楽談儀』に掲載される〈源太夫〉が最も古い部類に属する。その後、世阿弥の〈難波〉、作者不明の〈道明寺〉が続き、いずれも楽物の老神能として共通性を持つ。古来、太鼓に代表される打楽器は「卑賤の楽器」だった。余儀ない事情でこれを奏でる年老いた神は、下位に立つことによって相手を祝福する、藝能古来の特質を体現する特異な存在でもある。

翻って、太鼓を打つ趣向を脱した〈巴園〉には、そのような屈折は皆無である。仙童と連れ立って愉楽の舞としての「楽」を舞う老仙人には、もはやわずかばかりの影も射さない。屈服藝としての老神の「楽」は後世、観世長俊の〈大社〉にも受け継がれるが、それとは別の可能性を切り拓いたのが信光の〈巴園〉だと言えるだろう。

今回の詞章は、基本的には前回復興時に天野文雄氏を中心に作成されたもの(信光自筆本の転写とおぼしき天理図書館蔵の室町末期写本に原拠)に拠った。ただし、当該本よりも現代の(つまり江戸式楽の様式性によって整えられた)能形式によって細部を整備、構成等も一部見直してある。多岐に互るためここで一度には記載できない。詳細は以下の文中に明記した。なお、本来〈巴園〉は脇能であるから、〈眞之次第〉〈眞之一聲〉など

特有の囃子事で演出されるのが約束で、以下の演出にもそれらを想定してあるが、今回はあえて四番目物としての解釈で演ぜられた。したがってこの日の舞台では、ワキの出では常の《次第》、前シテの出では常の《一聲》が演奏された。

そのほか、当日の進行の実際については『能楽タイムズ』平成二十五年三月号にも報告を別記した。併せてご参照頂ければ幸いである。

平成二十五年一月十二日（土）午後四時半開演

横浜能楽堂企画公演「美の世阿弥・華の信光」第3回（第2部）

能〈巴園〉

前シテ（園守の翁）／後シテ（巴園の老仙） 大槻文藏

前ツレ（園守の姥）／後ツレ（仙女） 山本博通

後ツレ（青龍） 上野雄三

子方（仙童） 武富晶太郎・寺澤杏海

ワキ（勅使） 福王茂十郎

ワキツレ（従臣） 福王知登・喜多雅人

アイ（仙人） 善竹隆平

笛 藤田六郎兵衛／小鼓 大倉源次郎／大鼓 山本哲也／太鼓 観世

元伯

地謡 多久島利之（地頭）・上田拓司・浦田保親・山本正人・齊藤信

輔・水田雄昭・生一知哉・山田薫

後見 赤松禎英・武富康之・寺澤幸祐

初演監修 天野文雄／再演演出 村上湛

【留意点】

- 1 この上演本の詞章は基本的に平成十八年二月・大槻能楽堂自主公演（研究公演）版に拠る。ただし小段構成ほか、部分的に改めた。その箇所は節付・手付も改訂の必要がある。
- 2 間狂言の詞章は『狂言集成』に拠った右記の版に手を加え、今回は新版に変えた。《狂言三段之舞》は省いた。
- 3 今回は本協能形式と四番目物的協能形式と、両様を想定した（平成十八年の試演は後者）。良きほうを採用されたい。
- 4 後ツレ「青龍」は「セイリウ」ではなく、能〈道成寺〉でそう読んでいるとおり、古伝に従って「シヨオリウ」と読む。
- 5 詞章中頻出する「木の實」は、「キノミ」でなく「コノミ」と読むことで統一した。後場「渡り拍子」に「木々の木の實」とあり、これを「キギのキノミ」と読んでは耳にさわり、どうあっても「キギのコノミ」でなければおかしいところから割り出した統一措置である。
- 6 「巴園」については今回「バエン」と読むことを提案したい。古写本の中に表題を「馬援」と記す本があることから（法政大学能楽研究所現蔵『曲海』）、古くは「ハエン」と澄まらず「バエン」と濁って読んだことが察せられ、そのほうが引き締まって重厚に聴こえる効果もある。ただし口調の都合が優先ゆえ、どちらでも良きほうを採用、統一されたい。
- 7 精確を期すため総ルビを加えた。なお「含」とある部分は促音を吞む、能特有の発音部分である。

扮装と装置

◆前シテ（園守の翁）／小尉または阿古父尉。尉髪（淵明帽子にも）。

小格子。白大口（ナシにも）。シケ水衣または側次。サラエまたは萩箒（紅色金襴で飾る）。尉扇（腰に挿す）。

◆前ツレ（園守の姥）／姥。姥髪。無紅唐織。ヨレ水衣または側次。杉箒または萩箒（紅色金襴で飾る）。

◆後シテ（巴園の老仙）／皺尉または悪尉の類。白垂。輪藏帽子または唐帽子。無紅厚板。半切。白地袷狩衣。掛絡掛けても。唐團扇（腰に挿すか後見から受け取る）。鹿背杖（萌黄色金襴で巻き竹葉を付ける）。

◆後ツレ（仙女）／小面。黒垂。天冠（月輪立）。摺箔。色大口。長絹または舞衣。飾太刀佩きても。天女扇（懐中して出る）。桃実盤（ただし桃花は添えず）。

※仙女を二人出しても良い。その場合、扮装は二人類似、小道具は、一人は常の桃実盤、もう一人は銀盤に青梨を盛った新規作成の梨実盤。

◆後ツレ（青龍）／龍神出立。

◆子方（仙童・二人）／垂髪（頭頂より左右に梳き分け耳元で左右それぞれ輪に結い、飾髻で結び飾る）。摺箔。胴箔腰巻。法被または側次。童扇（懐中して出る）。

◆ワキ（勅使）／唐冠。大臣出立。

◆ワキツレ（従臣・二人）／大臣烏帽子。赤大臣出立。

◆アイ（仙人）／仙人出立。

作り物

◆一畳台上に山（ただし引廻シは用いず骨組みばかり。葦葉に直径二寸半の橘実を多く交える。橘実の色は作り物を包む緞子の色に合わせる）。

◆橘実（殺生石）の石の如き形態で山の葦葉から下（一畳台上のほぼ全面）を覆い、山の左右外側に子方の隠れ坐す余地を残す。三ツ割れ。黄橙色緞子で包む）。

◆碁盤（紅色金襴で作る。復曲（碁）に準ずる）。

詞章と演出

【地謡・囃子方それぞれ座に着けば後見まず一畳台を持ち出し大小前に据える。続けて橘実の作り物で覆った山を持ち出し一畳台の上に載せる。中に子方二人入り、碁盤もこの中に初めから入れて持ち出す。】

《眞之次第》または《次第》

【《眞之次第》または《次第》以下、ワキ着座まで脇能の定型どおり】

【次第】

ワキ・ワキツレ 治まる國の時を得て。治まる國の時を得て。草木もなびく御代とかや。

【名ノリ】

ワキ そもそもこれは漢の皇帝に仕へ奉る臣下なり。わが君まつりごとと正しく慈悲深くましますにより。國中にめでたき瑞相多し。中にもこの國のかたはらに巴園といふところあり。かの隣家に年久しき翁あつてかの園を守る者あり。しかるに巴園の古木の中に。奇特なる木の實出で来る由奏聞申す間。急ぎかの園に行き。木の實を見て參れとの宣旨を蒙

り。たゞいま巴園に急ぎ候。

〔上歌〕

ワキ・ワキツレ 仰ぎても。なほ頼みあるこの君の。《打切》なほ頼みあるこの君の。恵みあまねき時つ風。吹き収まりて春秋の。花も紅葉も色添へて。《打切》盛り久しく年を経る。木々の林に着きにけり。木々の林に着きにけり。

〔着キゼリフ〕

ワキ 急ぎ候ふ程に。巴園に着き候。承り及びたるよりも漫々たる園にて候ふぞや。しばらくこの所にてかの老人の在所を尋ねばやと存じ候。

《眞之一聲》または《一聲》

〔眞之一聲〕または《一聲》以下、〔問答〕まで脇能の定型どおり

〔一セイ〕

二人 秋も早。暮れ行く風の聲立てて。梢色づく。けしきかな。

ツレ むら立つ雲の朝嵐。

二人 冬ほど近き眺めかな。

〔眞之一聲〕で出た場合ここに《アユミノアシライ》を入れ、その間に舞台に入る。《一聲》で出た場合は橋掛りに並び立ったまま

〔サシ〕

シテ 緑樹重蔭四林に覆ひ。青苔日々に厚うして。

二人 おのづから塵なき木のもとを。掃はぬ風の朝清め。紅誘ふ嵐かな。

〔下歌〕

二人 朝露の光を磨く玉箒。《打切》

〔上歌〕

二人 手に取るも。老いを助くる杖となり。《打切》老いを助くる杖となり。起き居苦しき身なれども。春は花園吹き散るや。青葉に茂る夕涼み。《打切》〔一聲〕で出た場合この《打切》でツレは舞台に向き、二人ともにアユミ舞台に入り、「上歌」トメ「豊かなる身の住居かな」でシテは常座、ツレは正中辺に立つ。秋は紅葉の木のもとに。温め酒のたぐひまで。豊かなる身の住居かな。豊かなる身の住居かな。

〔問答〕

〔以下、シテはワキにとりどころアシライウ〕

ワキ いかにかにこれなる夫婦の者は。聞き及びたる巴園を守る老人にてあるか。

シテ さん候これは年久しくこの巴園に住みて。木のもとを清むる者なり。さて方々は帝よりの勅使にいたしますか。

ワキ 早くも見知り給ふものかな。さても巴園の木の実のこと老人奏聞申すにより。見て参れとの宣旨を蒙り。はるばるこれまで來たりたり。まづかの木の實出現のいはれ。詳しく語り給ふべし。

シテ さてはかたじけなくも帝の勅使にいたしますかや。〔ここでシテ、ツレともに勅使を敬う心で下に居、少し低頭しても良い〕。まづこの翁

巴園に住む事。一百餘歳の星霜を送る。立ったまま、下に居、どちらの場合もシテはここで正面を向く。しかるに巴園に年久しき橋の靈木あり。かの木に紫雲棚引き覆ふこと七日七夜なり。

〔シテとツレが下に居た場合、ここでともに立つ〕

ツレ そののち小鳥來たりつゝ。轉る聲も世の常ならず。

シテ 迦陵頻伽もかくやとばかり。色香妙なる小鳥の。雲に入るかと見えしのは。

「ここでシテとツレはワキへ向く」

二人 音楽虚空に響きつゝ。異香薫じて日も暮れぬ。朝に出で、これを見れば。山の端出づる朝日の如く。一間に餘る橋の。色香妙なる常世の木の實。神變奇特の靈實なり。

「神變奇特の靈實なり」と謡い終わると、シテとツレは元どおりともども正先に向く」

「掛け合ひ」

ワキ いはれを聞けばありがたや。かゝる奇特もこの君の。めでたき御代の瑞相なり。さてさて巴園の内においても。とりわきいづくの程やらん。

「シテはワキへ向く」

シテ おん道しるべ申すべし「ここでシテが正中へ出ると、引き換えに、今まで正中辺に立っていたツレは笛座前あたりまで下がる」。こなたへ入らせ給へとて。

「それまで脇座に立っていたワキは正先辺に出る」

ワキ かの老人と伴ひて。木深き蔭に分け入れば。

「シテは正面を向く」

シテ 森の下道露しげき。

「上歌」

「この一段は改編した。古写本では「また常盤木は色變へぬ」を謡い返すため、初演版ではそれ以下を別の「上歌」としていたが、「上歌」が二つ並ぶ異色（ことに脇能としては甚だ異例）を避けるため今回は「上歌」を二つ立てず、「また常盤木は色變へぬ」の謡い返しを省き、「萬木の竝ぶは筆の林にてゝめざまし草の名もしるし」まで全体を一つの「上歌」にまとめた。従って、この一段は節付・手付を見直す必要が

ある」

地謡 萬木の。竝ぶは筆の林にて。《打切》《打切》でワキはいったん脇座に下がる。ただし下居せず立ったまま」竝ぶは筆の林にて。梢彩る紅の。【シテは「花の面影」まで正中から正面へ六足ほど出つつサシコミ、「楊梅桃李まで」でヒラキ、「紅葉に残るながめかな」でワキに向く】花の面影残り来て。楊梅桃李まで。紅葉に残るながめかな。《打切》

「また常盤木は」でシテはワキに向かって少し出てワキと見合い、大橋へ案内する態でワキを誘い二人で右に取り舞台を回り込み、シテは常盤に行く。ワキは脇座から角へ行き作り物に向かって出、「光り輝く橋の」でじっと立って作り物をとくと見（両手を広げ左右にシカと面をつかう）、右に取り作り物の向かって右前に正先ウケて立つ。常盤に行つた

シテは作り物の向かって左手に正先ウケて立つ」また常盤木は色變へぬ。松杉鎮懐謙抑し。緑色濃きその中に。満月の山の端を出づるか。光り輝く橋の。めざまし草の名もしるしめざまし草の名もしるし。

【「眞之一聲」で出た場合は次段□□（勅使のコトバ「あら夥しの木の實や候」以下）は省き、地謡は《打掛》を聞いて「クリ」を謡う。《一聲》で出た場合は以下のとおり□□に続けて地謡は「クリ」を謡い継ぐ】

□□

ワキ あら夥しの木の實候ふや。承り及びたるよりも肝を消したる橋實なりと。【ワキはシテに向く。】老人に向かひ呆れ居たり。

「クリ」

【ワキは脇座に戻り下居。シテは正中の向かって少し左に出て正面を向き下居。同時にツレも地謡前に正先をウケ下居。ここでシテとツレの手道具は引き、シテの水衣の肩下ろし腰に挿した扇を手を持つなど、す

べて脇能「クリ」の定型どおり」

地謡 それ名君の奇特をあらはすこと。草木よりまづ色を見せ。花實の數もさまざまに賢王の奇特を廣めしなり。

「サシ」

シテ しかれば仙家の花實におきても。王母が桃實玄圃が梨。

地謡 東岸せいの栗までも。治まる御代のためしとなる。唐の世の帝は君臣に。

シテ 橘實を下し給ひしこと。

地謡 めでたき君の。恵みとかや「シテとワキと向き合い、《打切》でもとに戻る」。《打切》

「クセ」

地謡 こゝは巴園の橘の。昔も今もためしなき。常世の花の色變へぬ。

蓬萊宮と申すとも。かほどの木の實よもあらじ「シテとワキと向き合い、

《打切》でもとに戻る」。《打切》げにや所から年経る松の花までも。い

く十返りの色ならん。鶴も巢懸くる枝垂れて。巖の苔に流れ出づる。水

に住む龜までも緑毛の色ぞ年を経る。

シテ 尉が住みかはこゝなれや。

「シテは立ち、六足ほど出ながら「盤石垂羅」とサシコミ、「懸泉の水」

で悠然とヒラク」

地謡 盤石垂羅たゞこれ家。瓶には枸杞懸泉の水。「右に取り常座に行

く」また鼎には芙蓉伏火の。沙を練る住まひも目のあたり。「常座から

正面に出、「見る目に餘る橘の」で角トリ」見る目に餘る橘の仙境に至

る心地して。「左に回り脇正面からワキに向き正中の向かって少し左に

出「歸るさも」で下居」歸るさも思はれず。眺めに飽かぬ心かな。《打

切》「シテは《打切》で正面に向き直る」

「次の「ロンギ」の冒頭「これまでなりや老人よ」以下は、初演版では古型再現の意味でワキの担当にしているが、今回は現代通行のかたちに従い地謡の分担にした。返シ句と《打切》も加えた」

「ロンギ」

地謡 これまでなれや老人よ。《打切》これまでなれや老人よ。急ぎ歸りてわが君に。奏聞せんぞ嬉しき。

子方「作り物の内から子方二人で謡う」暫く待たせ給ふべし。今宵の月は橘の。「このあたりでワキは作り物に向く」みづから現はれて。勅使にまみえ申さん。

「シテはこのあたりで左に膝を繰って居立ち、「不思議や聞けば靈實の」で左手を出し作り物を見込む（もつとも、見所正面に背を見せるほどすっかり後ろ向きにはならず、半身に見込んでいれば良い）」

地謡 不思議や聞けば靈實の。内に妙なる聲すなり。そもや如何なる姿ぞや。

子方 今まみえじ待て暫し。更けゆく月に出で潮の。

地謡 さすや夕日も。

子方 紅の。

「子方「紅の」を間にシテは下居のままワキに向く」

地謡 紅葉の木蔭に待ち給へと。聞くより老人も「シテ立つ」。勇みを

なしていざさらば「ワキに向いたまま数歩出ながらサシコミ、次の「靈酒を勧め申すべし」でシッカリとヒラク」。木の實を求め客人に。靈酒

を勧め申すべし。「右に取り、回って常座に行き、トメの初句「林の奥に入りけり」で正面にシッカリとサシコミ、ヒラク」舞樂を奏し給へ

とて。夫婦伴ひもろともに。林の奥に入りけり。林の奥に入りけり。

「ロンギ」トメの返シ句「林の奥に入りけり」の間に常座から右に

取つて一ノ松に行き、止まる。以下、《來序》を踏んでシテ中入。ツレは「夫婦伴ひもろともに」で立ち、シテの中入に続き幕に入る」

《來序》

【來序】を崩して《狂言來序》に転ずるとアイの仙人、杖を突き常座に出で「立チシャベリ」あり。すべて定型どおり。なお、初演版にあつた《狂言三段之舞》は今省略。「立チシャベリ」終わり次第アイはそのまま退場】

「立チシャベリ」

アイ かやうに候ふ者は。巴園のかたはらに住む仙人にて候。さる程にこの巴園と申すは。緑樹重蔭四林に覆ひ。青苔日々に厚うして。まことにめでたき御園にて候ふが。ことには色香妙なる木の實のあまた成り出で申し候。しかるにこの園の内に。年久しき橘の靈木の御座候ふが。かの木に紫雲たなびき候ふ事七日七夜なり。朝に出で、これを見れば。なんぼう奇特なる御事にて候ふぞ。山の端出づる朝日の如く。一間に餘れる橘の實の成り出で申し候。まことに常ならぬ御事なれば。漢の帝の臣下宣旨を蒙り。この所へ御出でて候ふ間。巴園の翁との御年一百歳になられたるが出で會ひ申され。ありがたき仔細しく奏聞申して候ふほどに。かほどめでたき御代なれば。木の實の仙女橘實の内なる童子も現はれ出で。翁の杖も青龍となつて奇特を現じ。おのおの舞樂を奏し申さんと御事にて候。われらもこのかたはらに住む者なれば。この由觸れて戻らばやと存ずる。いかに皆々承り候へ。巴園の翁殿仙女を伴ひ御出であり。奇特なる木の實をあまた勅使に捧げ申すべきのみならず。巴園の不思議をいよいよ御見せあらうするにて候ふほどに。志の面々は。皆々近う参りて事の次第を御覽候へ。その分心得候へ。

心得候へ。

【アイ退場し、《下ガリ端》打ち出す。よきほどにて段取り、幕上げ、ツレ・仙女は桃實盤を捧げ持つて先に立ち、後シテ・老仙は鹿背杖を突きつつあとから出る。ツレは一ノ松、シテは二ノ松に立つ】

《下ガリ端》

「渡り拍子」《打切》

地謡 頼もしや。頼もしや。行く末遠きこの君に。なほ仙境の木の實の「數を連ねて」でシテとツレは舞台のワキに向く。」數を連ねて捧げんと。

シテ 玉體金漿。

【次の地謡「玉體金漿」でシテは正面に向き直り、ツレはアユミ舞台に入り、ワキの前に進み出て下に居、桃實盤を手渡す】

地謡 玉體金漿。交梨火棗や匡盧山の。唐桃も有明の。月の秋とて。紅に色づく。木々の木の實をとりどりに。木々の木の實をとりどりに。かの客人に捧げつゝ。

【ツレは「かの客人に捧げつゝ」までにワキに桃實盤を渡し終え、この一句をツレは下に居たまま聴き澄ましワキをとくと見込む心】

「二セイ」

仙女 さて金鏡の盃の。

地謡 露も薬の。酒とかや。

【ツレは「さて金鏡の盃の」と謡いながら懐中の扇を取り出しつつ立ち、アユミ、大小前で達拝（以上、忙しければ「かの客人に捧げつゝ」で立ち上がつても良い）《天女之舞》（二段が良い）を舞う。シテは「さて金鏡の盃の」で二ノ松から一ノ松へ移動し、床几に掛かり、ツレの舞

を見る。この間、シテは鹿背杖は携えたまま、後見はこれを引かない」

《天女之舞》（太鼓入り二段之舞）

「ワカ」

仙女 今は早。袖に包まぬ橘の。

子方 實を分け出づる。時世かな。《打上》

【定型どおり上げ扇した天女は「實を分け出づる。時世かな」で右ウケ大左右、打ち込みヒラキ、扇を畳みながらワキツレの次（笛座前）に行き床几に掛かる。子方二人は作り物内から謡う。シテは「實を分け出づる」で立ち、一ノ松から舞台へ向かいアユム】

「フリ地」

地謡 その時老人たちまちに「シテは鹿背杖を突きつつ舞台に入つて、常座を経て正面に出、一畳台と角柱前の中間に立ち、《打込打返》の間に作り物に向き直る（氣を変えて向き直る）。《打込打返》その時老人たちまちに。橘實に向かひ【サシコミ、ヒラキ】。忝くも。王地に生ずる植木として。などか宣旨に従はざらん【左袖を返しながらツカツカと作り物に寄り】。はやとく姿を現はすべしと【左袖を直し、両手で杖を振り上げ、「あらはすべしと」で□で囲んだ文字に合わせ】杖頭（T字型部分）にて作り物を大きく二つ打ち、角柱前まで下がり、「橘の●」の「●」に当てる杖を一つ強く突くと作り物は三つに割れ（後見は「三つ」の「つ」でコミを取り「割るれば」の「れ」に当てる橘実の作り物を割り放つ）、中に仙童は山の左右に分かれて中央の碁盤に向かい下居姿（後見二人は一畳台の左右端の下に見苦しくなきよう控え、「フリ地」トメの地謡「出でにけり」を聴き終えてから作り物を撒収）。仙童は「とりどり現はれ。出でにけり」で左右から交互に碁を打つ型□で囲

んだ文字に合わせ、慌てず悠然と碁石を置く。ただし碁石は持たず。向かつて右童子、左童子、右童子の順に都合三度布石【叩き給へば橘の。三つに割るれば仙人の姿。とりどり現はれ。出でにけり。《打上打切》シテはシテ柱下に行き床几に掛かる。子方は正面を向く】

【勅使を拜し】以下、初演時は「フリ地」としたが、今回ここで太鼓を打ち止め【ロンギ】に改める】

「ロンギ」

子方 勅使を拜し奉り。《打切》【子方は《打切》の間に懐から扇を抜き持ち、慌てず一畳台から下りる（後見はここで碁盤の作り物を引く）。子方は正中に行き、二人並んでワキに向かい下居。「今この君を仰がん」と謡いながら平伏、頭を上げ、「楽しみによもしかじ」で正面を向く】勅使を拜し奉り。今この君を仰がんと。橘實の仙郷商山の。楽しみによもしかじ。

地謡 その商山の楽しみと。聞くは四皓の顕化かや。

【次の「あらむつかしや今はたゞ」と子方二人は謡いながら、下居のまま右に膝を繰りシテの方に向く】
子方 あらむつかしや今はたゞ。巴園の老人も舞ひ給へ。

【シテは子方の「巴園の老人も舞ひ給へ」を聞いて、シテ柱下で床几に掛かったまま子方の方を向く。子方は謡いながらシテに向いたまま立つ】

地謡 巴園の老人も舞ひ給へ【地謡「巴園の老人も舞ひ給へわれらも共に」で子方二人はシテに向いたまま数歩出てシツカリとサシコミ、ヒラキ。そのあと右に取つて一畳台前に並び立つ】われらも共に。霓裳羽衣の。袖を返して。舞ふとかや。

《樂》

【樂】は五段（《盤渉樂》にはしない）。カカリノ段は子方二人で舞う。この間、シテはシテ柱下で床几に掛かったままこれを見る。初段で位シマルとシテは立ち、その場でクツコギ後見は鹿背杖を渡し、引き換えに唐団扇を受け取り（はじめから腰に挿してあるのを後見に抜かせても良い）、正面を向き、オロシで子方の間に割って入り、以下三人相舞。初段の最後に子方は退き、一畳台の左右にそれぞれ上がり下居。二段目からシテ一人が舞い通す。もしくは、二段目オロシまで子方と相舞、二段目オロシを過ぎてから子方が退き、以後シテの一人舞となっても良い。

【ワカ】
シテ 幾千代と。限らぬ不死の御薬を。【シテは上ゲ扇】《刻上》

【初演版では次の「フリ地」初句は「今この君に。捧げ奉り」と子方が謡ったが、今回はカエシ共に地謡に変更。言い回しにも手を加えた。
節付・手付ともに改編の必要あり】

【フリ地】
地謡 今この君に捧げ奉り【シテは右ウケ、大左右、打込ヒラキ】。《打込打返》【正中に行きワキに向き、一足踏ん込みつつヨセイし、ワキをシカと見込み】今この君に捧げ奉り勅使に向かひ恭くも。【ワキに対して説き示す如くそのまま下に居る】佛法王法は天地の如く。日月の如し。佛法繁盛し。王法榮えんと

【佛法繁盛し】でシテは下居のまま正面を向くと、後見は鹿背杖を持って出、唐団扇を引き取る（もしくはシテの腰に挿す）。シテが杖を手にして立つと子方二人は一畳台から下り、向かって左の子方は、シテが

右手に突いた鹿背杖を「竹杖をおつ取り」の「おつ」に合わせて両手で奪い取り、杖を捧げ持って三ノ松まで行き（揚幕の下を三尺ほど上げておく）、「虚空に投ぐると」に合わせて両手で杖を差し上げ、「見えつるが」で幕内に投げ入れると幕下ろす。子方はあまり慌てずに舞台に戻り、一畳台右上に上がりに正面を向いて下居。もう一人の（向かって右の）子方は、杖を奪った子方を見送りつつシテの後ろを通過して常座に行き、「袖に隠し」で左手を左袖の中に突き入れ右手で袖を取って袖を張り、「印を結び」で右膝を突き頭を下げて念ずる心。杖が幕内に投げ入れられると袖を直しつつ立ち、一畳台左上に上がり下居。シテは「虚空に投ぐると」でキリりと右袖を巻き上げツカツカと脇正面に出て左袖を大きく返し、半身の体勢で見込み、《早笛》になるのを合図に身を直し、唐団扇を手にして悠然と一畳台に上がり（唐団扇は、腰に挿したのが自力で抜き取れば抜き取り、あるいは一畳台に上がってから後見に腰から抜かせるか、預けていたのを受け取る）、作り物に入って正面を向き、床几に掛かる】告げ知らしめて。歸ると見えしが。老人の持ちたる竹杖をおつ取り。袖に隠し。印を結び。虚空に投ぐると見えつるが。竹杖たちまち青龍と現じて。這ひ出でたるこそ恐ろしけれ。

《早笛》

【早笛】は重くはず急調の位。段を取ってすぐツレ・青龍が舞台に出、常座に立つ】

【フリ地】

【以下、《舞働》を舞う龍神物の定型どおりに動く】

青龍 青龍勢ひ。あたりを拂ひ。

《舞働》

「フリ地」

青龍 青龍勢しよおりのせいひあたりを拂はらいひ。

【青龍は常座から前へ出て角トリ、左へ一度回って作り物へ向き直り「巴園の木の間を」でサシコミ、ヒラキ、「巻き上り」で打杖を持ったまま右袖をキリリと巻き上げ作り物に向かって出、右袖を直すのと引き換えに「また巻き下がり」で左袖を巻き上げて膝を突き、袖を直してすぐに立ち右へ取り常座へ行き、飛び返り、「たちまちに雲を起こすと」と左手で赤頭を取り見上げ、身を直し正面に向いたまま下に居る】

地謡 雲霧くもぎり桶かきの梢えだに上がり。巴園はえんの木の間まを。巻き上りのぼり。また巻き下がり。たちまちに雲くもを起おこすと見えつるが【位が静まる】。件くだんの仙人【シテは「件の仙人」で立ち、悠然と一畳台を下り、正面へ出ながら左袖を大きくかつぎ、正先に立つと高く又キ足して昇天の心。そのまま「虚空に上がれば」でシカと向こう正面を見込む】立ち来る雲くもに。うち乗りうち乗り虚空こくうに上がれば。【虚空に上がれば】のあと、地謡と囃子の位が進み再び急調に戻ると、青龍は立って正面を大きくサシ、そのまま左に大きく回り込み一ノ松まで行くと静止、呼吸を改めて幕に入る。子方二人は青龍が舞台を回り込むのに引かれるかのように立ち、一畳台から下りて青龍の後ろに続く。仙女もよきところで立ち、子方二人に続いて幕に入る。シテは正先で左袖をかついたまま「雲を巻き上げ行くあとを」までじつと立ち続ける】青龍二人の童子どうじを守護しゆごし。雲くもを巻き上げ行くあとを。【ここで地謡と囃子の位グツと静まる。シテは左袖を直しつつ少し下がり、右に取って常座に行き、「名残を惜しみ」でワキの方に少し出てシツカリ向き合うとシテはワキを見込みつつ正中に出、左袖

を巻き上げる】勅使ちやくしも翁おきなも名残なごりを惜おしみ。招まねけば招まねく姿すがたも遠とほく。【シテは返しの「招まねけば招まねく」で右袖を巻き上げつつ右に取り、常座に行き、両袖を直して右ウケ、左袖を返しながらツメ、留拍子。以上、本脇能の定型のトメ。四番目式に演じた場合は一ノ松に行つてからトメてもよし】招まねけば招まねく。姿すがたもかすかに。天あまつ雲くもにぞ入りにける。

【初演版ではトメの句「天あまつ雲くもにぞ入りにける」を地謡が謡い返したが、今回は謡い返さない】

以上

付記・ここに掲載したものは決定稿だが、能上演の性質上、当日の実際には小異が生じた。ただし、根本に関わる差はない。